

平成 26 年 2 月吉日

佛乗寺檀信徒の皆様へ

佛乗寺住職 笠原建道
総代 廣田正至

立春も過ぎ春めいてまいりましたが、皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。

さて、来月はお彼岸の月となります。このお彼岸には、ご先祖をはじめとする亡き方々への追善供養が私たち日本人の美德の一であるとされており、この亡き方を思う心を形に表したものが、お墓参りであり、お塔婆供養であるといえます。

日蓮大聖人は上野殿後家尼に与えられたお手紙で、

「いかにもいかにも追善供養を心の及ぶほどはげみ給ふべし」(御書・三三八)と仰せになります。

御文の「いかにもいかにも」は、下に願望・意志を表す語を伴う、「如何にも」を重ねて強調したことばで、「是非とも、なんとしても」という意味になります。また、「心の及ぶほど」の「及ぶほど」とは、心が働いている間、と言う意味に取ることができます。

ゆえに御文の意は、「亡き方を一時も忘れることなく、追善供養にはげみなさい」となります。

なぜ日蓮大聖人はこのように亡き方を思う修行を私達に勧められたのでしょうか。

このことを考える上で参考になる事例があります。それは、イラクのシャニダールで発掘されたネアンデルタール人の埋葬地と思われるところから、数種類の花粉や花卉が出土したことです。この花はネアンデルタール人が、仲間の死を前にして、自らの生を認識した証しであると思われる。

つまり大聖人様は、亡き方の命を通して、生きていることを考えるように、あなたの今世での命は100年を越えるものではありません。ですから、いまの瞬間を大事にしようではありませんか、と仰せ下さっていると拝するのです。お盆やお彼岸に亡き方々を思う修行は、自身を思う修行である、と心にとどめ精進をいたそうではありませんか。

以上